

架橋する「自」と「他」 研究者の多元的ポジショナリティに関するエスノグラフィ

原 めぐみ
(和歌山工業高等専門学校)

1. はじめに

「一元から多元に広がる関係」を様々な角度からアプローチしていくことが本特集のねらいであるが、本稿では、フィールドワーカーである筆者自身の多元的ポジショナリティについて論じてみたい。一つの「自」と多元的に関係が広がっていく「他者」への共感について、筆者の感情が積極的に登場するエスノグラフィを通して例示していく。これは、フィールドワークで出会ったものを、既存の理論に当てはめていく中で生じるエスノグラフィを執筆する際の複雑性を提示することを目的としている。本稿は、本特集の浜田論文で紹介されている「ポスト多元」的な状態を議論する一つの試みであるということができる。

まず、研究に至るまでの筆者の自分史を記述しつつ、フィールドに入っていく過程を「他者との出会い」として紹介する。フィールドワークにおいて、調査者の属性や感情はフィールドワークそのものに大きく影響することは議論されている (Kleinman 2007)。しかし、それらについて積極的に書く機会は案外少ないものである。社会人類学者の Tim Ingold は、著書『Being Alive』の中で、研究対象者の話をただ聞いて解釈するのではなく、研究者もその物語に「参加する」のだと述べ、さらに、研究者は時に物語の聞き手として自らの生活史の中で、聞き取った物語を位置付ける作業が必要だという (Ingold 2011: 162)。ここから発想を得て、本稿では、物語へ参加しようとする筆者自身の調査時の属性やその時の感情を確認するため、フィールドとの出会いを描写する。

次に、フィールドワーク中の体験に基づき、「自」と「他」の境界線が薄くなったり濃くなったりするエピソードをエスノグラフィックに記述する。これまで、筆者は、若者移民の一人ひとりの語りを聞き取りながら、「ライフストーリー」を書いてきた。桜井厚 (2005) は、ライフストーリーを「口述の語りそのものの記述 (アカウント)」を意味するだけでなく、調査者を調査の重要な対象であ

る」(p. 9) と位置づけている。ライフストーリー研究の原点は、母集団の少ない人びとを対象とすることにより、「まだ十分に知られていない社会的・歴史的リアリティの側面を照らし出すこと」(ibid. p. 28) である。したがって、筆者の研究においても、まだ十分に知られていない若者移民のリアリティに照明を当てようと、ライフストーリーを試みたのである。

また、筆者自身も日本とフィリピンを往来しながら、移動する人々や NGO などとラポールを構築しながら、「複数地エスノグラフィ」を描いてもきた。George Marcus (1995) が提案した「複数地エスノグラフィ」(=Multi-sited Ethnography) は、現代の移民研究者に重要な研究視点を与えた。これまで欧米などの移民受入国におけるマイノリティとしての移民研究が主流だったのに対して、出身地域での調査も行うことによって、移民の社会的文化的背景を理解する多方向的な分析を可能にした。例えば、カリブ海地域からアメリカやカナダ、イギリスなどへ移住した越境家族について複数地域で調査をした Karen Olwig (2007) は、移住先社会と出身社会との間で相互に影響しあう越境家族のネットワークの中で、移民たちの関係性と、創造される場所について描写した。筆者も研究協力者が移住した都市や出身地域を行き来し、同じ人々やグループと継続的に関わり合いを持ちながら、越境家族について考察を深めてきた。

調査を行う中で、序論で永田が述べている「巻き込まれる」研究者自身の存在に気がつくことがある。また、巻き込まれながら、筆者自身の感情も揺れ動いている。こうした研究者の感情や共感は、フィールドワークに大きく作用する。Kleinman & Copp (1993) は、長期間、研究協力者と接することによって「感情移入をめぐる〈感じ方〉規則を共有」することができるという。筆者にとってのフィールドワークとは、研究協力者との人間関係構築において心温まる想いや苦い経験を幾度もしながら、いかにフィールドワークが「感情労働」(Hochschild 1983) であるかを思い知る過程でもあった。以下では、調査する「自」がいかに「他」の社会と密接に交流し、そ

のにより、描くエスノグラフィにいかなる影響を与えているか、を考察していく。

2. 「他」との出会い

筆者が初めてマニラを訪れたのは16歳の時だった。母が英語教師だったため、田舎という環境ながらも外国から来た人々と接する機会が多い家に育った。そのため、幼少期から留学に行くことを意識していた。高校1年生の時、長期留学のプログラムに関心をもった。留学先の選択肢に「フィリピン」があり、東南アジアの文化に興味を惹かれていた当時の筆者は躊躇なく応募した。

10か月間のフィリピン留学は、見事に筆者の新たな人生のチャプターを開いてくれた。最初の数か月は、英語もろくに話せないことに劣等感を抱いていたが、ホームシックやカルチャーショックを一通り経験した頃には、英語にタガログ語が混ざったいわゆる「タグリッシュ」での授業についていけるようになっていた。また、タガログ語の勉強に関しては、ホームステイ先に住み込みで働いていた歳の近いメイドさんに教えてもらった。

日本の家族や友達とは、月に1回30分だけテレフォンプカードを使って電話をしていた。フィリピンの私立学校のパソコン教室で、個人用のメールアドレスの作り方をクラスメイトに教えてもらい、得意げにYahooメッセージでのチャットをしていた。SNSもスマートフォンもなかった。航空運賃がいくらかかるのかも見当がつかなかった。だから、長期留学を終え、ニノイアキノ国際空港に向かう道中、「もう二度とホストファミリーや友達には会えないかもしれない」と思い、マニラの暁を見ながらひとり号泣したのを覚えている。それくらい、2000年代前半はまだ海を越え帰国することが永遠の別れのように感じる時代だった。それでもいつか必ずマニラに帰ってこようと心に決めた。

帰国後、大学進学のため受験生となり再適応に苦しみながらも、無事に入試に合格した。フィリピンでの留学経験を活かしたいと思い、入学してすぐに大学の近くの小学校の「国際教室」でボランティア活動を始めた。そこで出会ったのが、フィリピンと日本を行き来する中学生ノリコちゃん（仮名）だった。ノリコちゃんは、中学校では不登校状態であり、特別に小学校の国際教室に通っていた。大学2年次の頃、ノリコちゃんの母親とカフェでお茶をしたことを皮切りに、神奈川県に住むフィリピン人女性への聞きとりを始めた。

また、大学3年次の夏休み、同級生が就職活動を意識

し始める中、非営利団体でインターンシップをした。それが、フィリピン人と日本人を両親にもつ子どもに法的支援を行なっている「JFCネットワーク」だった。同団体の紹介で、当時中学3年生のマミちゃん（仮名）の高校受験のための家庭教師をすることになった。マミちゃんは受験勉強を始める数か月前まで、学校に通うことができなかった。というのもフィリピン人の親が、オーバーステイにより入国管理局に収容され、子どもたちは施設で暮らしていたのだ。しかし、ファミレスで勉強する彼女は、逆境のなかでも苦勞を顔に出さない明るくて今時の女の子だった。

2008年、筆者は大学4年生になり、就職活動の末、企業から内定をもらっていた。同年6月4日に、外国人の母親のもとに生まれた「国際婚外子」の国籍確認訴訟の最高裁判決が下された。無事に受験を乗り切り、高校進学したばかりのマミちゃんも同じ境遇だった。当日、筆者は原告や、フィリピン人の母親、事務局スタッフや弁護士らとともに大法廷で息を飲んで、裁判官が読む専門用語だらけの判決文を聞いていた。弁護士の一人が満面の笑みでこちらを見た。原告側が勝訴したことを理解した。長年、子どもたちに日本国籍を取得させたいと、裁判を続けてきた母親や支援者らの運動の成果が実ったのである。10代の原告たちは、まだ、何が起きているのかわからない様子だった。

筆者も、この最高裁判決が自分の人生のターニングポイントになるということはこの時はまだ自覚していなかった。ただ、歓喜に沸く当事者と支援者に紛れて、市民運動の歴史的な瞬間に立ち会っている、そう感じていた。そして、この奮闘の結果が、今後の日本社会にどのような影響を与え、子どもたちの将来をどう変えていくのかを知りたいと漠然と思っていたのだった。

同年7月に大学院を受験することを決め、9月に院試を受け、合格した。内定通知をもらった会社にその取り消しのお詫びの電話をかけた。2008年9月はリーマン・ショックで世間が騒がしくしている頃だった。筆者にとって、企業説明会やOBOG訪問で会った大手企業で働く人々や、就職試験の面接官との会話よりも、よっぽどノリコちゃんやマミちゃんとの対話が刺激的で魅力的だった。

ただし、人生の岐路において、興味の赴くままに進路を選択することができたのは、少なからず筆者の家族に経済的・社会的資本があったからだ。ノリコちゃんやマミちゃんはどうか。彼女たちは興味の赴くままに将来を選択し、歩んでいるのだろうか。同世代の人びと

を対象に調査を行っているがゆえ、自分との対比を意識せざるを得ない。

「どういった立ち位置でフィールドにいるのか」という自問は、その後も続いている。20代前半は、「大学生」であり、NPOの「インターン」であり、ノリちゃんやمامちゃんにとっては、週に1度、勉強を一緒にする「ボランティア」であった。23歳の時、国立フィリピン大学（University of the Philippines、略して「UP」）に研究留学をしたことから、「UP学生」という立場を利用してフィールドワークは入っていた。しかし、研究協力者に「エリート」とみなされ、他者化されてしまっていた危惧はある。20代後半は、「研究者の卵」という振る舞いをしようと妙に意識していた。フィールドにおいて「他の研究者は、もっと研究者らしい振る舞いをしているのではないか」と自信を失うこともあった。徐々にフィールドでは、現地の女性団体や若者グループの手助けを受けながら、この人たちと一緒に研究をしているのだ、という気持ちで調査に臨めるようになってきた。それがやっと30歳手前の大学院を修了する頃である。

この頃の自分といえば、博士課程まで進学してしたのはいいが、アルバイト生活で収入は少なく、就職への不安があった。さらに「アラサー」という女性特有の焦りが募っていた時期であった。企業に就職したり、結婚して子どもを産んでいるメインストリームに対し、自分は社会の周縁にいる感覚であった。そんななか、「マイノリティ」と呼ばれる人々への共感が高まっていたのだ。

上記のような所属に関する立ち位置ではなく、自身のエスニシティについても問われることが多くあった。話を聞かせてもらっていた日本人とフィリピン人を両親にもつ若者たちは、支援団体などから「JFC¹⁾」と呼ばれていたが、かれらのアイデンティティについて質問すると、こだまのように「その質問をしている私は何者か」という問いが脳裏をよぎる。さらに、かれらからも「あなたは『JFC』なの?」「お母さんはフィリピン人?」と直接的に尋ねられることがある。「血縁」はフィリピンと無関係であるので、「両親ともに日本人である」と答えると、その質問をした人は残念そうな顔をするし、こちら側は期待に応えられなくて申し訳ないような気持ちになる。自らの「当事者性」について繰り返し問われ、自問し、そしてその都度、相手によって微調整しつつその回答を用意してきた。このようにフィリピンにルーツを持たないことに落胆されると、お門違いだとわかっていながらも、「当事者研究であれば研究動機の説明がしやすいのに」と自らの属性を悔いることもあった。

このように10年の時を経て、調査対象者らとの関係性の変化や、筆者自身の社会経済的背景の変化により、筆者のポジショナリティは一つではなく、複数の面をもつようになった。こうしたフィールドでの多面的な研究者自身もまた、その相手との等身大の対話の中において重要な分析対象となると考えられる。

3. 当事者と導線を共有する

フィリピンと日本を行き来するフィリピン人女性やフィリピンにルーツをもつ若者を対象に調査を始めてから、もう10年もの月日が経った。この間、フィリピンをほぼ毎年訪れ、フィールドワークを行っている。フィールドでは、10～20代の調査協力者やその母親たち、家族に生い立ちや暮らしぶり、移住の意向や将来の展望などをインタビューしてきた。また、その人物が来日したと知ると、移住先まで出向いて行って、移動の経緯や日本での生活について再び聞き取った。

以下では、筆者が登場する2つの短いエスノグラフィとともに、フィールドワーク中の「自」と「他」が交差する瞬間について考察を深めたいと思う。

3-1. 越境家族の一員として

フィールドに3日もいると、もうずっとそこに住んでいたような気になる。インターネットに頼らず、言われた通りに目的地までの道のりをジープニーの乗り継ぎで辿り着けるようになり、魚の生臭さと肉の血の匂いの混じったウェットマーケットで食材を買って作った料理を絶品だと頬張り、泊まっている家の子どもたちが筆者のことを躊躇なく「Ate²⁾」と呼ぶようになると、筆者にとってもうそこはホームになる。

2007年に初めて訪れたX市での調査の際は、いつもジュリーさん（仮名）宅にお世話になっている。筆者は、ジュリーさんの15歳年下で、彼女の末妹の2歳年下である。だから、ジュリーさんはいつも筆者を妹の一人のように面倒を見てくれる。

ジュリーさんの家族は11人きょうだいのうち6人が海外での就労を経験しており、典型的なフィリピン人海外労働者（Overseas Filipino Workers、略して「OFW」）一家である。1980年代、長女のジュリーさんは大学時代の友人に誘われてマニラへ「タレント」のオーディションを受けに行った。幼い頃から父親はアルコール中毒でろくに働きもせず、母親の苦労を見ていた彼女は、妹や弟の学費を稼ぐため、エンターテイナーとして日本で就

労することを決めたのだった。スタイルが良く、気立ての良いジュリーさんは、日本人の「ママさん」に気に入られ、6か月間の在留資格が終了しても、再度「指名」が入り、10回以上来日した。兄と弟は建設作業員としてサウジアラビアとクウェート、妹たちは家事労働者としてクウェートと香港、末の妹もジュリーさんの紹介でエンターテイナーとして日本で働いた。

ジュリーさんには一人息子がいる。働いていた店の常連客だった日本人の恋人が息子の父親である。彼女は結婚の意思がなかった恋人には最初から期待せず、フィリピンに帰国して、「これが最初で最後の妊娠」と覚悟を決め、シングルマザーとして産み、育てることを選択した。出産してからも、1年の半分は日本に出稼ぎに行った。その間は、息子の世話を妹に任せ、経済的に息子と家族を支えることに集中した。「エンターテイナーには終わりがくる」「一生続けられる仕事ではない」と自覚し、貯めたお金は自宅建設のための投資金とした。

案の定、2005年の在留資格「興行」厳粛化に伴い、エンターテイナーの来日が難しくなってからは、X市に自分が建てた家で暮らしている。その家は、住人の出入りが激しい。筆者が訪ねるたびに住んでいる人が変わっているのだ。2007年は、ジュリーさんと息子、弟と妹、クウェートにいる妹の娘、香港にいる妹の夫とその2人の子どもが住んでいた。2010年は、妹が結婚し子どもを産んだので妹の夫と娘と一緒に暮らしだし、クウェートにいる妹の娘と香港にいる妹の夫の姿は見当たらなかった。直近の2017年に訪れた際には、弟も結婚したため家を出ていき、クウェートに出稼ぎに行っていた妹が一時帰国していた。

筆者はここ数年、年に1度はジュリーさんの家に居候させてもらっている。移住労働者の里帰りのような感覚だ。そして移住者にとって「ホーム」を維持することが簡単ではないことを身をもって理解する。例えば、海外出稼ぎ労働者の里帰りにおいて、おみやげほど大事なものは無いのだが、フィールドワークを始めたばかりの頃、おみやげの数を完全に見誤った。先に滞在したマニラで配りすぎたのだ。おみやげを楽しみに待っている子どもたちの落胆した表情とまったく異なる。一人ひとりにおみやげがなかったせいで、滞在中居心地の悪さを感じ続けるはめになった。罪の意識に駆られ、日本に帰ってから急いでシーフードカップヌードルやハローキティのタオルを段ボール箱に詰めて送った。これは、海外在住のフィリピン人が母国にお土産や日常品を詰めて送る、いわゆる「バリックバヤンボックス」(=balikbayang box)であ

る。

さてジュリーさんの今の役割は、香港とクウェートで家事労働者として働く妹たちの子どもたちの面倒を見ることである。移民研究のジャーゴンを用いれば、その子どもらは「取り残された子どもたち」(=Left-behind children)である。ジュリーさんも日本に働きに行っていた時は、息子の面倒を妹たちに見てもらっていたから「代わりばんこ」(We take turn.)と言った。子どもたちの身の回りの世話をする代わりに、食費や生活費がジュリーさんに送られる。彼女の現金収入の多くは妹たちからの送金である。そして彼女は送金の一部を子どもたちにお小遣いとして再分配する。ジュリーさんからお小遣いをもろうと子どもたちは、海外に住む母親とビデオチャットをするためインターネットカフェへ走っていく。

筆者のフィールドワーク初期では、この子たちはどこへでもついてきて、フィールドノーツを取っているときもそばに寄ってきて、夜も同じベッドで寝たがった。しかし今では立派なティーンエイジャーになり、「また来たの」というクールな態度である。母親たちへのチャットの頻度も以前より減っている。「取り残された子どもたち」は、自分の置かれた状況を冷静に受け止めながら、大人になっている。

トランスナショナルリズムを論じる際、バリックバヤンボックスや、携帯電話やインターネットを通じた移民と母国の家族との関係維持の方法が注目される (Okamura 2000)。また、移民の女性化が進む中で、取り残された子どもたちへの社会的ケアの問題が論じられてきた (Parreñas 2005)。Ninna Sorensen いわく、移動がいかにか人びとの所属意識やアイデンティティに影響を及ぼしたかを理解するには、移民自身が自らの置かれた「状況」(=situatedness)をどう解釈しているか、そしてかれらがいかにか歴史を文化的に構築しているのかに耳を傾けなければならない (Sorensen 1998)。ジュリーさんの家で暮らしたことで、フィリピン出移民が置かれた状況を体現し、自分も越境家族の一員になったかのようにふるまうことができるようになる。送金の義務さえないものの、おみやげの重要さや、バリックバヤンボックスの意味を知ることになり、OFWに取り残された子どもたちの成育環境を定点的に眺めることができた。

フィールドにおいて、先行研究で書かれている現象を目の当たりにする。フィールドワークが先行研究の再帰性を確認する作業のようになってしまう。しかし、エスノグラフィが場所や人々を変えただけの読み物になって

しまわないよう、より一層、フィールドワークにおける感覚を研ぎ澄まさなければならない。

3-2. 真冬の水風呂と冷えた缶ビール

国内では、東海地方によくフィールドワークに行った。東海地方には外国人労働者の雇用機会が多く、フィリピンで出会った母子の多くがこの地域に移住しているからだ。筆者は2月のとても寒い日に、Y市に住むカレンさんとミキちゃんを訪ねた。夕方、駅まで迎えにきてくれ、ファミリーレストランで夕飯をとった。小学1年生になったばかりのミキちゃんの学校生活について、相談も交えて話してくれた。

そして「狭いから恥ずかしい」と言いつつも、招き入れてくれたアパートは2DKの部屋だった。もう一人、20代の女性がこの部屋に暮らしているらしいが、この女性は繁華街のフィリピンパブで働いており、この日は朝まで帰ってこなかった。

カレンさんも昔、九州地方でエンターテイナーとして働いていたが、子どもを産んでからはフィリピンで暮らしていた。ミキちゃんの父親からの送金が途絶え、父親に認知請求し、ミキちゃんの日本国籍取得のために来日したのだった。来日の仲介団体は、カレンさんに清掃員としての職を与えつつ、渡航費貸付と手数料の借金70万円を背負わせた。ミキちゃんが眠ったらその話をゆっくり聞かせてもらおうと思っていた。

カレンさんがミキちゃんを寝かしつけている間にお風呂に入った。しかし、溜まっていたのは、真水だった。お湯はいくら待っても蛇口から出てこなかった。仕方なく体と髪の毛を洗った。震えながらお風呂から出ると、カレンさんが「ガス止まっているみたい。ごめんなさい。」と申し訳なさそうに言った。彼女は、水風呂上がりの筆者に冷たいビールを差し出した。人身売買に関係する話を聞こうとメモを取り出したが、彼女の様子がおかしかった。

今にも泣き出しそうだったので、事情を聞くと、つい最近、同僚の男性に性的暴行を受けたのだと静かに話し始めた。スーパー銭湯の清掃員として働いていた彼女は、比較的時給の高い夜シフトで働いていた。普段の帰宅は、午前1時か2時である。そもそも車がなければ身動きの取れない地域なので、会社が用意した職場への送迎車を利用する。仕事が終わりと、送迎車が来るのを待っていたが、その日は、バンの到着が遅かったのだそうだ。一緒に待っていた同僚の男性が、いきなり襲ってきたのだという。抵抗したら殺されると思い、必死で耐えたのだそ

うだ。

彼女の話静静地に聞いていた。しかし、彼女の話の聞いていないはずが、途中から自分の記憶がフィルム写真のように浮かんできた。頭の中で封印していたはずのマニラでの調査中の出来事が。調査が遅くなり、親切に送ってくれた車の中で、乱暴されそうになったことが。あのだらしなくにやけた男の顔が。筆者の脳裏にフラッシュバックしてきたのだった。頭に浮かんでくる記憶を一生懸命に消しながら、彼女の話に集中しようとして、冷たいビールをすすった。目の前の若い母親も、優しく寝息を立てる娘を起こさないよう静かに鼻をすすりながら、冷たいビールを飲んでた。

カレンさんは、「誰にも言えなかった」と言った。まだ30代前半のカレンさんは、シングルマザーとして来日し、身寄りがなく、仕事ばかりの生活で近くに頼れる友達もいなかった。ましてや娘には心配をかけたくなくて、気丈に振る舞っていたという。家事労働者やエンターテイナーなどの移住女性たちの脆弱性については、ずいぶん前から支援団体の調査や先行研究でも明らかになっていることである (Heyzer, Lychlama a Niejholt, & Weerakoon 1994; Takeda 2008)。

筆者も、誰にも言えなかった。研究者になるべく、ガツガツと調査をしようと意気込んでいた時期、まさに、この頃に被害を受けた。相手は、筆者の調査に協力的で、親切に色々なところに連れて行ってくれたので、てっきり研究者として見なしてくれていると思い込んでいたが、思い違いだった。一人でフィリピンに迷い込んだ身寄りのない若くて無抵抗な女として見られていたのだ。思い返せば、夜遅くまで外を出歩いたり、相手が調査に協力的ということで、油断して二人で行動したりと、隙だらけだった。そしてそのことが「研究者として恥ずかしい」と思ってきた。のちに知ったことだが、女性調査者のフィールドワークの特殊性やリスクについては、椎野・的場 (2016) で触れられている。また、女性研究者同士の会話の中でたまに出てくるのが、調査中のセクシャルハラスメントの話題であるが、女性研究者の「あるある話」に留まっている。こうした性的暴力や嫌がらせ、明らかな女性蔑視によって研究の中止を余儀なくされた知人もいる。

移住女性でも、フィールドに入りたての女性研究者でも、誰かからまなざされている立場というのは、共通しているのかもしれない。ここで生まれたのは、カレンさんとの共感であり、自分が生身の人間であるという感覚である。透明人間に対して、人は泣きながら話さないだ

ろう。年の近い、同じ性を持つ、冷たいものを冷たいと感じる人間として、その夜カレンさんと筆者とは語り合った。

このように、積極的に調査協力者と関わる中で、自分自身の感情と向き合うべき場面がいくつもあった。大学院生時代は、このような感情の起伏を繰り返しながらも、民族誌的なエスノグラフィを意識し、できるかぎり長くフィールドにいるような心がけた。現在も、上述のような出来事を連続的に経験することによって、フィールドとの対話を積み重ね、エスノグラフィを体得しようと試みている。

4. 「自」と「他」を架橋する

M. コップは、障害をもつ人びとのための福祉工場で臨時職員として働きながらフィールドワークを行っていた時のことを回想している。障害をもつ人びとと自分との質問と返答から、彼女は、調査協力者らに「自」と「他」のライフスタイルの違いを感じさせ、かれらに「欠けたもの」を思い起こさせた可能性を否定しない。それによって彼女は「罪の意識」を感じたと言う (Kleinman & Copp 1993)。

筆者もコップが感じたような罪の意識を感じ続けてきた。生まれた日に日本国籍を取得し、幼い頃から父、母、妹、祖父母と共に暮らし、共働きの両親に支えられ経済的に不自由な生活をし、大学院まで教育を受けることができた。生い立ちを「反省」し、時に「罪深く」感じる場面に幾度として直面してきた。

反省的に自分の調査体験を書くということは、フィールドワーカーの特性なのかもしれない。宮本常一『調査される迷惑』で例に上がってくるような悪い研究者なんじゃないか、とおぞましく思うこともある。前田・秋谷・朴・木下編『最強の社会調査入門』でも多くの社会学者が自らの調査について反省的に語っている。現場の人に教えてもらっている、現場の地を学ばせてもらっている、という申し訳なさを常に背負っている。

それがゆえに、筆者は調査を始めたすぐの頃、支援団体のボランティア的ポジションでフィールドに入ろうとしたのかもしれない。罪の意識を少しでも軽減させるためだ。

大学院生時代を振り返ると、筆者は「研究」と同じくらい、支援団体等の「活動」に従事してきた。いまだに研究者と実践者の狭間にいる。支援団体に調査協力者を紹介してもらうことが多かったので、話し手は「支援者」

に話をするつもりで筆者のインタビューに応じてくれたかもしれない。この「支援する側」という面が強く出すぎてしまうことが、大学院生となり「調査」を始めたばかりの頃の悩みであった。

しかし、フィールドワークにおいて試行錯誤を重ねていくうちに、結果的に研究と活動、そして10代の頃から抱いているフィリピンへの情熱がシンクロし、多面的な自己というものが確立し始めている。

本稿では、研究者の立ち位置に関する変遷を回想録的に記述し、調査する側のアイデンティティの所在について記述した。筆者がフィールドで落ち込んだり、居心地が悪かったり、感情が起伏したりするのはなぜなのかを検討してみるとそのものが、分析の一部として認めることができる。様々な属性の差異により線で引かれた「自己」と「他者」。その川のような線に橋をかけようとしてきた。川の対岸が身近になるようなフィールドでの感情的な経験の積み重ねにより、描く世界をより立体的に記述できるようになるのではないだろうか。

注

- 1) 支援団体などは、日本人とフィリピン人を両親にも子どもたちを「Japanese-Filipino Children」と呼称し、「JFC」はその略称として使われる。詳しくはHara (2013)を参照されたい。
- 2) フィリピン語で年上の女性をさす呼び名。

参考文献

- Hara, M. (2013). What to call Ourselves? Representation and terminology of Mixed Heritage Japanese-Filipinos. *Langkit*, 3, 89-108.
- Heyzer, N., Lychlama a Niejholt, G., & Weerakoon, N. (1994). *The Trade in Domestic Workers Causes, Mechanisms and Consequences of International Migration*. Kuala Lumpur: Asian and Pacific Development Centre.
- Hochschild, A. (1983). *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. Berkeley: University of California Press.
- Ingold, T. (2011). *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*. Taylor & Francis.
- Kleinman, S., & Copp, M. (1993). *Emotions and Fieldwork*. SAGE Publications.
- 前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆編 (2016)『最強の社会調査入門——これから質的調査をはじめるときのために』ナカニシヤ出版。
- Marcus, E. G. (1995). Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-sited Ethnography. *Annual Review of Anthropology*, 111 (4), 95-117.
- 宮本常一・安溪遊地 (2008)『調査されるという迷惑——フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版。

- Okamura, J. N. (2000). Transnational Migration and the Global Filipino Diaspora. *JCAS Symposium Series, 10*, 107-125.
- Olwig, K. F. (2007). *Caribbean Journeys: An Ethnography of Migration and Home in Three Family Networks*. Durham and London: Duke University Press.
- Parreñas, R. S. (2005). *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford: Stanford University Press.
- Sorensen, N. N. (1998). Narrating Identity across Dominican Worlds. In P. M. Smith, & E. L. Guarnizo, *Transnationalism from Below*. 241-269 New Brunswick, N.J.: Transaction Publishers.
- Takeda, J. (2008). *Behind the Drama of Filipino Entertainers in Japan*. Quezon City: Batis Center for Women.
- 桜井厚 (2005) 『境界文化のライフストーリー』 せりか書房 .
- 椎野若菜・的場澄人 (2016) 『女も男もフィールドへ (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ 12)』 古今書籍 .

Crossing-linkage between Self and Others: Ethnography on the Multi-positionalities of a Researcher

Megumi HARA

This paper explores the multi-positionalities of a researcher by illustrating the ethnography shown the encounters with others and multiple-selves in the field, which is one of the approaches to discuss the expanding relationships from monism to pluralism and now towards post-pluralism. First, this paper describes the author's first encounters with people who eventually became the informants of her research. Second, it describes the experiences of being aware of "self" and "others" throughout the multi-filed ethnographic field research. It is emphasized that if a researcher him/herself can show his/her multi-positionalities in the field, especially when conducting a multi-ethnographic research, the relationships between the researcher and informants would expand in various ways.

Keywords : ethnography, multi-positionalities, field work